

堺本枕草子の再構成行爲

——「女」と「宮仕へ」に関する記事をめぐって——

山 中 悠 希

一 はじめに

『枕草子』諸本のなかでも、堺本は本文の構成ならびに文章表現が他系統本と比べて大きく異なっている。三卷本・能因本には見られないような独自本文も多く持つが、それらについてはなお十分に議論されたとはいえず、堺本の性質を論じるためにも、詳しい分析の必要がある。従来、堺本は前田家本とともに「類纂本」と呼ばれてきたため、両者の性質は同じようなものとされがちであった。しかし、詳しく見ていくと、堺本は全体を通して細かな部分にまで配慮された編纂が行われており、その達成度は高いとおもわれる。先の拙稿では、この類纂という言葉のみでは説明しきれない堺本の編纂のありようを、堺本の再構成行爲として、『枕草子』の生成・享受の面から積極的に捉えなおすことを提言した^①。

本稿はこの拙稿を引き受けて、堺本に見られる宮中出仕に関する叙述、および女性に関する叙述を具体的に検討する。『枕草子』

は、中宮定子に仕えた女房清少納言が書いたものとされている。また、『枕草子』では宮中出仕がすばらしいこととして肯定的に書かれている、と基本的には受け止められている。清少納言自身の体験を記した回想的な記事にも、基本的に、中宮に仕える誉れ、宮廷世界に身をおく喜びなどが前面に出されている。しかしながら、堺本の場合、「宮仕へ」に関する一連の記事を見ていくと、右に述べた通常の『枕草子』理解には収まらないようにおもわれる独自の記述が見出せる。『枕草子』の一系統本である堺本が、このような本文をもつことには注意すべきであろう。本稿では堺本において「女」と「宮仕へ」とがどのようなものとして位置づけられてくるのかを探りながら、そこから導き出された堺本の性質が、堺本の成立、『枕草子』の享受などの問題と、どのように結びつけられてくるのかを考える。また、今後の見通しとして、堺本の記述の持つ批評性の問題にも言及しておきたい。

二 堺本「女は」の段の検討

現行の三巻本・能因本には見られない注目すべき本文として、はじめに堺本「女は」の段を採りあげる。まず、三巻本・能因本の「女は」の段を見てみたい。

【参考A】三巻本「女は」（能因本も同一）

女は 内侍のすけ。内侍。（三巻本一六九段）

右のように、三巻本の「女は」の段は、二項目を挙げるのみのごく短い類聚段である。能因本も三巻本と同じである。対して、堺本の内容はまったく異なるものである。

【堺本文1】「女は」

女は おほどかなる。下の心はともかくもあれ、うはべはこめかしきは、まづらうたげにこそ見ゆれ。①いみじきそらごとを人に言ひつけられなしたれど、みちみちしきあらがひ、わきまへなどはせで、ただうち泣きなどしてゐたれば、見る人おのづから心苦しうて、ことわりよし。（堺本八五段）

堺本の場合は、「は」型類聚群のなかに置かれてはいるものの、三巻本・能因本と比べると随想的な内容の、やや長めの文章となっているのである。

一方、前田家本ではこれら二種類の文章を両方とも含んでいる。

【参考B】前田家本「女は」

女は おほどかなる。下の心はともかくもあれ、うへは子めかしきはまづらうたげにこそ見ゆれ。いみじきそらごとを

人にいひつけられなしたれど、みちみちしくあらがひわきまへなどもせで、ただうち泣きてゐたれば、見る人おのづから心ぐるしうて、ことわりつかし。内侍のすけ。内侍。（前田家本六七段）

前田家本は、前半が堺本に近く、後半が三巻本・能因本に近い、合作のような本文になっている。前田家本は、現存堺本の祖本と能因本の祖本とを校合して作られたというのが通説になっており、支持できるとおもわれる。前田家本が書写された時期は鎌倉中期を下らないといわれ、また校合の際に使われた堺本祖本と能因本祖本とは現存本に近いものであったと推定されている⁽⁴⁾。よって、当該箇所は堺本文についても、遡りうるかぎり堺本に独自のものである可能性が高く、比較対照する意味は大きい。

三巻本・能因本の「女は」の段は、「内侍のすけ。内侍」という短いものではあるが、「清少納言」の、あるいは『枕草子』に描かれた「宮中出仕論、女性論などが論じられる際に頻繁にひかれるきわめて重要な段といえる。『枕草子』ではたびたび「内侍のすけ」もしくは「内侍」が賞賛とあこがれの対象として語られるからである。次に三巻本における「内侍のすけ」および「内侍」の用例を挙げる。

【参考C】三巻本における「内侍のすけ」および「内侍」関連の記述⁽⁵⁾

①あは、さりぬべからむ人のむすめなどは、さしまじらはせ、世のありさまも見せならはさまほしう、内侍のすけなどにてしばしもあらせばやとこそおほゆれ。…〔中略〕…また

内の内侍のすけなどいひて、をりをり内へまゐり祭の使などに出でたるも、面立たしからずやはある。(三卷本二段)
①「俊賢の宰相など、『なほ内侍に奏してなさむ』となむ定めたまひし」(三卷本一〇二段)

②内わたりに、御乳母は、内侍のすけ、三位などになりぬれば、重々しけれど、……(三卷本一七九段)

③また、おはしまし、女房など候ふに、上人、内侍のすけなど、はづかしげなるまゐりたるとき、……(三卷本一九〇段)

④内侍の車などのいとさわがしければ、……(三卷本二〇六段)
右の例からは、天皇の身近に奉仕できる、はれがましい公的な女性の役職として「内侍のすけ」もしくは「内侍」が認知されていることが読み取れよう。『枕草子』におけるそうした職へのまなざしについては既に先行研究も積み上げられている。⁶⁶

しかし、堺本の場合は日記的記事を持たないこともあって、【参考C】の⑤を除いて現存堺本には存在しない。したがって先行研究における議論がおおよそそぐわなのである。「女は」の段も「内侍のすけ。内侍」という女性の職掌を挙げるのではなく、女房・女官に限定されない、ひろく女性の振舞い方に関する批評となっている。女は「おほどか」に、表面上おっとりとしているのが「らうたげ」に見え、ひどい「そらごと」を言われてもただ「うち泣き」などしていればよい、というのである。

この堺本の文章は、じつは前の段から続けて読むことによつて、その意味するところがより鮮明になるとおもわれる。三卷本・能因本・堺本では、「女は」の段の直前には「法師は」の段

が置かれている。まず三卷本・能因本の本文を確認すると、

【参考D】三卷本「法師は」(能因本も同一)

法師は 律師。内供。(三卷本一六八段)

とあり、「律師」と「内供」の二項目を挙げる類聚段となっている。一方、堺本では、

【堺本本文2】「法師は」

法師は ことすくななる。男だにあまり②つきづきしき

はにくし。されど、それはさてもやあらん。(堺本八四段)

という、批評的な文章になっている。そして、前田家本では、

【参考E】前田家本「法師は」

法師は 言すくななる。をとこだにあまりつきづきしきはにくし。されど、それはさてもやあらなむ。律師。内供。(前

田家本二二段)

というふうには、やはり合成的な本文を持っているのである。

【堺本本文2】の「法師は」の段は、「法師」の口数を問題にしたあと、「男だにあまりつきづきしきはにくし」、すなわち「男でさえ、もつともらしくべらべらと弁が立ちすぎるのは気に入らない」と言いつつも、「されど、それはさてもやあらん」と態度がやや軟化して終わる。「男だに」は、「法師」との対比で持ち出された語句だが、この一条に引き続いて【堺本本文1】「女は」の段の「女は おほどかなる。……」の一文があらわれるため、文脈上「法師」と「男」、そして「男」と「女」という対照関係が成り立ってくる。すると【堺本本文1】の末文、「見る人おのづから心苦しうて」の「見る人」も、「女」を見る「男」という意

味合いが濃く読み取れてくる。⁽⁸⁾さらに、【堺本文2】「法師は」の段の二重傍線②「つきづきしき」の意味を勘案すると、「女は」の段の二重傍線①あたりの文意も明瞭になってくる。つまり、「男ですら口が達者すぎるのは気に入らないのに、まして女は、いつわりごとを言いつけられても、もっともらしい理屈を言い返したりすべきではない」という批評が展開されているのである。

堺本の、とりわけ随想群の文章は、章段として区切られた枠を取り払って、ゆるやかに連なつた文章として読んでいくことができることを以前論じたが、この「法師は」と「女は」の段においても、一連の文の流れをくんだ解釈が有効であろう。この有効性は、前田家本の構成との比較からも窺える。前田家本は、批評的な文章自体は含んでいるものの、本文が合成的になっているうえに、次に示すように「法師は」の段と「女は」の段が離れた箇所⁽⁹⁾に置かれているため、堺本のような対比的な読み取りは難しくなっている。

【参考F】前田家本における記事の配列

法師は	(前田家本六二段)
説経師は	(前田家本六三段)
雑色、隨身は	(前田家本六四段)
小舎人童は	(前田家本六五段)
牛飼は	(前田家本六六段)
女は	(前田家本六七段)

さて、このように堺本「女は」の段の特徴を確認したうえで、女性の発言を封じるような「女は」の段の内容をどのように捉え

ていく必要があるだろうか。堺本の「女は」の段に見られる「おほどかなり」「こめかし」「らうたげなり」「うち泣き」といった言葉は、あるタイプの女性の特徴をあらわす典型的な形容句として、セットで使われることがしばしばある。主な用例を『源氏物語』と『無名草子』から引用する。

【参考G】「おほどかなり」「こめかし」「らうたげなり」「うち泣き」の用例

㊦「らうらうじうかどめきたる心はなきなめり。いと児めかしくおほどかなりむこそ、らうたくはあるべけれ」と思し忘れずのたまふ。

（『源氏物語』「末摘花」巻、亡き夕顔をしのぶ光源氏の発言）
①ただうち泣きたまへるさま、おほどかにらうたげなり。

（『源氏物語』「夕霧」巻、落葉宮の描写）
㊵「女三宮こそ、いとほしき人とも言ひつべけれど、…（中略）…あまりに言ふかひなきものから、さすがに色めかしきところのおはするが、心づきなきなり。かやうの人は、一筋に子めかしく、おほどきたればこそらうたげれ。」

（『無名草子』、『源氏物語』批評における女三宮に関する叙述）

また、楠道隆氏は「女は」の段の文章について、

大胆な臆測が許されるならば堺本文は後人の増補で殊に「女は」の段は源氏物語「雨夜の品定め」に於ける……たゞひたぶるに児めきてやはらかならん人をとかくひきつくるひてはなどかみざらん心もとなくともなほし所あるこ、ちすべし……あたりに着想してゐると思はれる。これも堺本編者の

態度に注意すると一概に却けられるものとは思はれぬ⁽¹⁰⁾

と述べている。『源氏物語』との影響関係については現時点では不明とせざるをえないが、それよりも、こういった女性を批評する文言が、『枕草子』という名のついた書物に記されている、ということの意味を考えていく必要があるのではないか。

おっとりとした女性を評価すること自体はとりわけ珍しい価値観でないとおもわれるが、『枕草子』に書かれた文章となると事は違ってくる。『枕草子』の日記的章段などでは、体験者としての清少納言が、宮中などの場において男性貴族たち相手に和漢の知識を駆使して様々に渡り合うエピソードが印象的に語られており、その記述が宮廷讚美・中宮賞賛の方法ともなっている。そういった面から見ると、堺本の「女は」の段は、そのような論理とまっとうから対立する、いわば『枕草子』としての自己を否定しかねない文章であるようにおもわれる。現存堺本には日記的章段が存在しない。それゆえ、堺本のなかに書かれている女性への言及として、「女は」の段が有する意味は大きいのではないだろうか。

三 『枕草子』に描かれた「宮仕へ」をめぐる

女性のあり方という観点から『枕草子』を検討することは、作品の性質上、女房論、出仕論に深く結びついていくとおもわれるが、堺本の随想群には三巻本・能因本には見られない独自の「宮仕へ」記事が少なからぬ量含まれており、注目される。この独自本文に関しては、宮崎莊平氏・田中新一氏がそれぞれ異なる見解

を示している。宮崎氏は

三巻本にはなく前田家本や堺本にみられる記述であるが、「すべてうちわたりのやうに……」⁽¹¹⁾「かへすがへすめでたきものは……」⁽¹²⁾などをも視野に収めておくならば、中宮讚美の背景ともいふべき「命も身も、さながら捨ててなん」⁽¹³⁾「さて、その左衛門の陣などに」の段、との中宮への一途な心情、帰依の姿勢の基盤が、いっそう鮮明になってくるはずである。

と述べて、中宮讚美の性質を補強するものと捉える。他方、田中氏は

堺本に見る限り作者の定子中宮家頌賛意識を確かめることはかなり困難である⁽¹⁴⁾

とする。しかし両氏の論考は、三巻本を中心とした従来の『枕草子』の研究史の延長線上でなされており、堺本を綿密に検討しているとはいえない点で問題がある。

これまでの研究史において、『枕草子』の「宮仕へ」については日記的章段の検討を主として、そこに描かれる中宮定子付の女房としての清少納言に注意が向けられていた⁽¹⁵⁾。また、『枕草子』の出仕論として有名な文章に、「生ひさきなく、まめやかに」⁽¹⁶⁾の段があるが、この段の内容も合わせて、『枕草子』の宮中出仕の記事は基本的に定子讚美へと収斂していくこと、またそこで説かれているのは中宮女房としての理想像であり、一定以上の身分の女性の「宮仕へ」についてであることがすでに指摘されている⁽¹⁷⁾。

しかしながら、現存堺本には日記的章段や「生ひさきなく、まめやかに」の段が含まれない。前節で検討した「女は」の段の例

を思い起こしてみても、三巻本・能因本と同じ論理を当てはめて読むことが適当とはおもわれない。この点については、田中新一氏の

日記的章段と跋文——これが堺本にはとにもにない。脱落したものとする有効な証明は容易でない。逆に三巻本・能因本に日記的章段と跋文がともにあり、堺本にともにないことが、事の本来的なあり方を有力に示唆しているとも言える。⁽¹⁸⁾

という指摘が示唆に富む。しかし、ここで言われている「事の本来的なあり方」とは、堺本の本文のほうが原態に近く、三巻本の本文は中宮讚美の意識下に執筆・補筆された改訂版・完成稿であるという見方を指すものと考えられるのだが、この結論には従いたい。以上の経緯を確認すると、堺本が独自にもつ「宮仕へ」記事について、なお改めて詳しく見ていく必要があるだろう。

次に引用するのは、宮崎氏が採りあげたうちのひとつ「すべて、うちわたりのやうに」の段である。三巻本・能因本にこの段はない。

【堺本文3】「すべて、うちわたりのやうに」(三巻ナシ。㊦二三

九)

すべて、うち*わたりのやうによき宮仕へ所はなし。たのもしくめでたきをばさるものにて、ただすずろにはづかしく、をかしきことぞ、限りなきや。殿ばら宮仕へは、君ひとところをこそは見たてまつれ。関白殿ばかりこそ、殿上人つねに参りまかづる所はあめれ。③されどとたちかうたち、よしめきやはする。ただ見参ばかりにて、うるはしだちてこそ

あめれ。④家ひとつかしきものにする上達部をはじめ、殿上人、それよりしも受領なるなにくれまで、うちに参るをばいみじきことにしてこそ心づかひしためれ。⑤我よりまざりたる君達、おもとびと達のやうに言ひ交はし、もてなしたるさまで、限りなきや。かく言へば、あたらむ人は人なめくやあらむ。それはいとあしかるべき。人はいと見苦しきものなり。局などのつくろはまほしき所あれば、うちつくりめして、よろづ心にまかせて作らせつつ、すべて何事も言ふべきにぞあらぬ。月の明かさも、世の中の所には似ず。雪、はたさらなりや。(堺本二三段 *朽木本、鈴鹿本以外「うち」ナシ)

宮中出仕のすばらしさを讃える文章であり、「限りなきや」という賛辞が二度繰り返されて感嘆の気分を高めている。ここでの宮廷礼賛と出仕推奨の文脈は、前節で押さえたような三巻本・能因本における身分の高い女性の社会勉強的な「宮仕へ」論とはやや異なっているとおもわれる。まず傍線部③、⑤のように、宮中こそ、多くの貴頭に立ち交じって「よしめ」いた振る舞いをし、言葉を「言ひ交は」すことのできる最も「よき宮仕へ所」とされる。傍線部⑤の「我よりまざりたる君達、おもとびと達のやうに」という表現からは、上流階級層に対する強い意識と交流の喜びが読み取れよう。また、傍線部④では「上達部」、「殿上人」、「受領なるなにくれまで」といった、さまざまな身分の男性たちが、参内を「いみじきことにして」「心づかひし」ている様子が、出仕のすばらしさを保証するものとして描かれている。三巻本・能因本で語られていたような、身分ある女性に向けた発言とは異なる

り、宮廷の高貴な人々からは身分的にも距離のある人々にとっての、宮廷世界の憧憬化、權威化を促すような「宮仕へ」礼賛の記述といえるのではないか。換言すれば一般的、直接的、素直な宮廷礼賛ともいえるのだが、着目したいのは、なお続いて宮中にまつわる話題が置かれている点である。

【堺本文4】「五節のころ、御仏名のをり」(三能ナシ。節二四〇)

五節のころ、御仏名のをり、臨時の祭の試楽など、その日の御物忌みにあたりたるには、上達部などもこもり給へる中に、ただこの正月まで頭なりつる人の、宰相になりて、宿直めづらしくなりたるが、昔にかへりたるを、いかがなど、主殿司して消息させて、細殿にたちよりなどしたるも、朝夕めなれしをりよりは、やむごとなくおぼゆるこそ、うちつけなれ。……(堺本二三四段)

右に挙げた「五節のころ、御仏名のをり」の段は、細殿での貴人との交流について語る内容で、前の段【堺本文3】の傍線部⑤などで述べられていた、高貴な人と交渉できる栄誉の叙述を引き継いでいるものとおもわれる。さらに後続の「よにわびしくおぼゆることは」の段では、高貴な人々を前にした際に起こる様々な問題が採りあげられてくる。

【堺本文5】「よにわびしくおぼゆることは」(三能ナシ。節二七

四

よにわびしくおぼゆることは、はづかしき人のある折に、奥の方にうちとけごととも言ひ、もしは、ほかより来たる者などの、あやしき事とも言ひつづけなどしたるこそ、「あな

かま」なども言はまほしけれ。制せんにもはしたなく、聞き入れぬさまにてまぎらはすも、すべて汗あえてわびし。なかなか、となる人も聞き入れて、笑ひなどしたる。さるかたにてたはぶれてやみぬ。うしんなる人は、はづかしと思ふらんとて、聞き入れぬさまにもてなし、そら知らずしたる。心のうちとかかる人を見るらんと思ふらんかし。⑥宮仕へ所の局などは、まして下衆ぢかなれば、あさましき事どもこそおほかれ。立ちぬる後に「いかでかくはあるぞ。あな心う」など、爪弾きをし聞かすれば、⑦「いなや、聞こえやしはべりつる。みそかにこそ、なにがしは言ひはべりつるが、それかと言ひはべりつる」など、すべりもて行きて、ふかくいとほしとだに思ひたらぬ心どもこそあさましけれ。後のことを思へば、かへすがへすいみじく言へども、常にさのみこそあるや。またこれは制せらるることぞと思ひいでたることにや、⑧あたらしく言ひなしつくるふ様も、いとなかなかをこなり。また、さやうなる人に会ひて、いみじう心にききさまにもてなし、しはぶきなどするに、五つ六つばかりなるちこの、北面にて、乳母などのおそく聞きけることを、走りきてうれへかくることわりなけれ。「こはなぞ。あなあやし」など言ふをも聞かず、あやにくににぐるを抱きていざなふを聞きて、笑ひかけられたるも、わびてはあらねど、いとねたくおぼゆれ。(堺本二三五段)

立派な人物を客として迎えているときに、奥から聞こえてくる不都合な会話などを挙げて、「よにわびしくおぼゆること」、「す

べて汗あえてわびし」と困惑のさまが表現される。これまでのものがましさが反転してしまうようなトラブルの様子である。さらに、続く傍線部⑥では、「宮仕へ所の局などは、まして下衆ぢかなれば、あさましき事どもこそおほかれ」と述べられる。困った事態は使用人・外部の者などによって引き起こされるもので、「宮仕へ所の局」が「まして下衆ぢか」な場所であるとまで言ってしまう文の展開と、前段までの賞賛との落差には看過できないものがあるようにおもわれる。この後も厄介ごとの話題に筆が費やされ、「あさましけれ」「いとなかなかをこなり」「わりなけれ」「いとねたくおほゆれ」と、あたかも賞賛の言葉を塗りつぶすように困惑と非難の意が重ねられていく。こういった文章の連動作用は章段単位の読みでは見落とされがちになるだろう。なお、前田家本では「すべてうちわたりのやうに」の段（二三九段）と「五節のをり」の段（二四〇段）は宮中関連の記事をあつめたグループ（二三二―二四一段あたり）の中にまとめられているが、「よにわびしくおほゆることは」の段（二七四段）はかなり離れた場所に置かれ、堺本のような連続性は読み取れない。前田家本の「よにわびしくおほゆることは」の段は下衆・従者・女房などにまつわる記事群に置かれているため、下層の者を対象とした出仕全般の話題という面が強調されるかたちになっている。

客人の前で恥をかくというトピックの例としては、「かたはらいたきもの」の段の「まらうどなどに会ひて物言ふに、奥の方にうちとけごとなど言ふを、えは制せで聞く心地¹⁹」というようなものもある。しかし【堺本文5】は、理想世界としての宮廷出仕

を称揚しながら、直後その場で起こりうる具体的なトラブルの数々を列挙することで賞賛の文勢を引き戻し、逆に注意を喚起させてくる。また、使用人たちが反論する様子を採りあげて、二重傍線⑦、⑧のように、苦情に際しての彼らの弁明を「ふかくいとほしとだに思ひたらぬ心ども」、「あたらしく言ひなしくろふ様」だと非難している。先に行った【堺本文1】の「女は」の段の検討と照らし合わせてみると、とくに「みちみちしきあらがひ、わきまへなどはせで、ただうち泣きなどしてあたれば、見る人おのづから心苦しうて、ことわりよし」というような文言といみじくも重なり合ってくるようである。つまり、堺本では下位の者、部外者の言論を抑えるような叙述が見られるが、そこに「女」も組み込まれてくるのだと考えられるのではないだろうか。

四 堺本と批評的行為

さて、宮崎氏の採りあげたもうひとつの段「かへすがへすもめでたきものは」の段にも言及しておきたい。

【堺本文6】「かへすがへすもめでたきものは」（㊦・ナシ。㊦二

三三）

かへすがへすもめでたきものは、後の宮の御ありさまこそあれ。生まれ返りてもなる世ありなんや。宮はじめの作法、御へついななど渡したてまつるありさま、この世の人とやはおほゆる。……（堺本二七八段）

この段における「後の宮」云々の記述は、呼称などの面からとくに定子などの個人を断定しがたい一般的な内容と言える。堺本

の表現は特定の個人に還元されることのない项目的なものになっているのである。【堺本文4】⁽²⁰⁾ なども同様の例であろう。以上のように、表現と構成の両面から比較すると、堺本の「宮仕へ」関連記事は、三巻本・能因本に見られる宮廷出仕の論理とは異なる位相にあるとおもわれるのである。

ところで、【堺本文6】の次に置かれている堺本独自の内容は興味深いものである。

【堺本文7】「若き人の」(三巻ナシ。節二八三)

若き人の、なにがしけれがしの集、物語かき集め、ささげて読みなどすること、いとをかしきことなれ。ことおほく、あけくれおほやけごとしげき殿ばらの上たち、受領、里里のおとなしかるべき北の方などの、営むことおほかるに、そのことは捨てぬ、いとをかし。まして、つれづれとうちかしづかれたらん人のむすめをば、なにごとをして明かし暮らすべき。⑨そは、世の中に物語、歌などは読みても、「そこもとは」とあり。かかり」とも、えがたき所をも見ときてはめにもくみもすること、かひあれ。正月一日はらかななど見るやうにてやむはいとかひなし。(堺本二七九段)

右に挙げた「若き人の」の段では、女性の趣向として歌集や物語を読むことを評価する。三巻本・能因本では話題にのぼってこないような、受領・里住みの北の方といった階層の女性たちの読書行為への言及であり、『枕草子』の享受層の面からも注意される。そのレベルとしては、傍線部⑨のように、ただ漫然と眺めるのではなく、習得した知識を活用して比較・論評までこなすこと

が要求されているのである。

【『枕草子』は批判することで成立した文学という指摘が既にある。⁽²¹⁾ しかし、堺本の場合は、三巻本・能因本の持つ批評性とはまた別種の批評性を有しているようにおもわれる。堺本の批評性は、その再構成行為と深く関わっていると考えられるのである。

たとえば、相当に工夫が凝らされて再構成されたとおぼしい堺本は、『枕草子』自身を対象とした一種の批評的営為の産物とも言えるのではないか。再構成行為をひとつの批評行為と捉えるというような視点が、堺本の批評性を論じるにあたり有効ではないかと考えている。具体的な検討は今後の課題とした。⁽²²⁾

五 おわりに

本稿では、堺本が「清少納言」の「枕草子」という名を冠しながら、いわゆる『枕草子』的な論理からそれてくるような内容をもっていることについて、「女」と「宮仕へ」とをキーワードに検討を試みた。

『枕草子』は『源氏物語』ほどの聖典化はなされなかったものの、「清少納言」の書いたものとして知られ、享受されてきたことに違いはないだろう。堺本の書名も、現存本の限りではあるが大半が「清少納言枕草子」あるいは「枕草子」となっている。つまり堺本も、あくまで「清少納言」の「枕草子」として、「一条朝の女房の書いたもの」として読まれることを要求するテキストなのである。しかしながら、「清少納言」の「枕草子」という名目のもとにありながら、堺本は、一般的に考えられているような、

『枕草子』的な物の見方に相応しない記述を含み持っているのである。

堺本についてこれまでなされてきた説明はおおよそ断片的なものが多く、内部まで総合的に検討したうえでその性質が評価されることはほとんどなかったが、これからは堺本を再構成本として捉えなおし、文化史のなかに積極的に位置づけることが可能になってこよう。とりわけ、平安末期以降の社会的背景の動向、王朝文化の対象化の問題、ジェンダーの変遷の問題などと重ね合わせて論じられるのではないかという見通しを立てている。また、堺本の批評性についても課題が残されている。これらについては稿を改めて検討したい。

※堺本の引用本文及び章段番号は基本的に林和比古編著『堺本枕草子本文集成』（私家版、一九八八）の吉田本本文により、古典文庫の影印版も参照して、適宜漢字を当て、歴史的仮名遣いに改め、句読点、濁点、鍵括弧等を施した。また、明らかな意味不通の箇所は、他の堺本文を参照して私に校訂した。堺本以外の『枕草子』の引用本文及び章段番号は、三巻本は新編日本古典文学全集、能因本は日本古典文学全集、前田家本は田中重太郎『前田家本枕冊子新註』（古典文庫、一九五一）による。ただし私に表記を改めた箇所がある。

※『蜻蛉日記』『源氏物語』『無名草子』の引用本文は新編日本古典文学全集による。

注（１） 拙稿「堺本枕草子の類纂形態―複合体としての随想群とその展開性―」（『中古文学』第八十号、二〇〇七・十二）

（２） 楠道隆「枕草子異本研究―類纂形態本考証―」（『枕草子異本研究』笠間書院、一九七〇↑初出一九三四）

（３） 池田亀鑑「前田本枕草子解説」（『前田本まぐらの草子』育徳財団尊経閣文庫、一九二七）

（４） 注（二）の楠氏前掲論文。

（５） この他に実在の「内侍」「内侍のすけ」に関する記述もある。以下に用例を挙げる。

・「右近ぞ見知りたる。呼べ」とて、召せば、……（中略）……右近内侍召して、「かくなむ」と仰せらるれば、……（三巻本七段）
・右近内侍のまゐりたるに、……（中略）……右近内侍に、「かくなむ」と言ひやりたれば、……（三巻本八三段）

・職におはしますころ、八月十余日の月あかき夜、右近内侍に琵琶ひかせて、端近くおはします。（三巻本九六段）
・宮のほらせたまふべき御使にて、馬の内侍のすけまゐりたり。（三巻本一〇〇段）

・……と啓したれば、右近の内侍などに語らせたまひて、笑はせたまひけり。（三巻本二二二段）

（６） 石坂妙子「内侍」を演じる女房―〈書く〉清少納言の位相―」（『日本文学』第四八巻第五号、一九九九・五）など。

（７） 従来「つきつきしき」の意味が不審とされる。池田亀鑑氏は「物事に調子を合せる態度をいうか」（『全講枕草子（下）』至文堂、一九五七）とするが、田中重太郎氏は「つきつき（継・次次）」の形容詞形で次から次へと続けざまであることの意と説く（『前田家本枕冊子新註』及び旺文社文庫『枕冊子（下）』一九七四。田中重太郎・鈴木弘道・中西健治『枕冊子全注釈（五）』（角川書店、一九九五）、速水博司『堺本枕草子評釈』（有朋堂、一九九〇）も田中説を踏襲する。しかしながら、今回「つ」とめては、「還響の近くなりたれば」など、つきつきしう言ひなした）（『蜻蛉日記』中巻・天禄二年）、「言葉多かる人にて、つきつきしう言ひつづくれど、……」（『源氏物語』「若紫」巻、「まかでさせたまふべきさま、つきつきしきことつけども作り出でて、……」（『源氏物語』「真木柱」巻）などの用例に鑑みて、「もつともらしく、いかにもふさわしく」

話をする意と解釈した。

- (8) 旺文社文庫『枕冊子(下)』及び『枕冊子全注釈(五)』でも、「見る人」は「男」であると注記されている。

- (9) 注(1)の拙稿。

- (10) 注(2)の楠氏前掲論文。

- (11) 後掲の【堺本文3】を参照。

- (12) 後掲の【堺本文6】を参照。

- (13) 宮崎莊平「『枕草子』の性格」女房日記とのかかわり―(『女房日記の論理と構造』笠間書院、一九九六↑初出 一九八二)

- (14) 田中新「『枕草子三巻本の性格』(『枕草子講座 第三巻』有精堂、一九七五)

- (15) 『『枕草子』の「宮仕へ」をめぐる論考の主なものを以下に挙げる。
野村精一「宮廷文学としての枕草子」(『日本文学研究史論』笠間書院、一九八三↑初出一九五七)、石田稜二「解説」(『新版枕草子 上』角川書店、一九七九)、三田村雅子「『日ざし』『花』『衣装』―宮仕へ讀美の表現系―」(『枕草子 表現の論理』有精堂、一九九五↑初出一九八〇)、小森潔「枕草子の始発―『宮』にはじめてまゐりたるころ」の段をめぐる―」(『枕草子 逸脱のまなざし』笠間書院、一九九八↑初出一九九〇)、津島知明「『宮仕へ』輝くとき―枕草子「生ひ先なく」の段から」(『国文学 解釈と教材の研究』第五二巻第六号、學燈社、二〇〇七・六)など。

- (16) 三巻本二三段、能因本二段、前田家本三二一段。
(17) 湯本なぎさ「おひささなく」第二二段」(『枕草子大事典』勉誠出版、二〇〇一)、原由来恵「枕草子に描かれた教育観」(『枕草子

大事典』勉誠出版、二〇〇一)など。

- (18) 注(14)の田中氏前掲論文。

- (19) 三巻本九二段。能因本は一〇一段、前田家本は一三八段、堺本は一二段が相当。

- (20) 拙稿「堺本枕草子における類聚の方法―項目の流動と表現の差異をめぐる―」(『平安朝文学研究』復刊第十四号、二〇〇六・三)

- (21) 高橋亨「へもとき」の文芸としての枕草子」(『源氏物語の詩学』名古屋大学出版会、二〇〇七↑初出一九九六)

- (22) 堺本を批評行為のひとつの体現と見るならば、【堺本文7】のような「物語、歌など」を論評する場に『枕草子』のような冊子(書物)そのものが登場する可能性も考えられる。その場合、【堺本文7】は、当の『枕草子』が批評の対象となりうることを示唆する記述と捉えられてくのではないかと、また、現存堺本は跋文などの自己言及的な文章をもたないが、堺本の姿と記述とが、いわばひとつの自己表明となりえているのではないかと考えられてくる。読書行為、書物の生成などとも関わる大きな問題であり、堺本以外の作品も含めて、平安末期から鎌倉期の時代背景を見渡しながら多角的に考える必要がある。詳細な検討は別の機会に譲りたい。

〔付記〕

本稿は、平成十九年度早稲田大学国文学会秋季大会(於早稲田大学、平成十九年十二月一日)において発表した内容に基づいている。ご教示いただいた先生方、先輩方に心より厚く御礼申し上げます。なお、本稿は平成十九年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)(日本学術振興会特別研究員DC)による研究成果の一部である。